

稲作情報

(春作業特集:育苗、土づくりなど)

令和4年度第9号

令和5年3月15日発行

福島県喜多方農業普及所、JA会津よつば、
喜多方市、北塩原村、西会津町

播種準備

【塩水選の濃度の目安】

区分	比重	水10L当たり(kg)	
		食塩	硫安
うるち	1.13	2.1	2.7
もち	1.10	1.6	2.0

(1) 塩水選

- ・ばか苗病やもみ枯細菌病に感染している種籾を除去するため、消毒済、未消毒を問わず種籾の塩水選を行います。

(2) 種子消毒

- ・購入した種子が「未消毒種子」の場合は、必ず薬剤や温湯による種子消毒を行いましょう。
- ・プロクロラズ剤（商品名：スポルタック乳剤、スポルタックスターナSE）に耐性を持つばか苗病菌が県内でも確認されています。前年にこれらの剤を使用したにも関わらずばか苗病の発生が見られた場合は、今年は異なる剤を使用してください。
- ・健全な種子をばか苗病に感染している種子と一緒に浸種すると、健全な種子も感染する可能性がありますので、感染が疑われる種子がある場合は分けて浸種してください。

(3) 浸種（水浸し）

- ・浸種時の水温は10～15℃とし、浸種期間は積算水温で100℃（浸漬水温×日数）を目安にします。ひとめぼれ、天のつぶ、五百万石は2日程度長く浸種しましょう。
- ・浸種時の水量は、種籾重量の2倍以上で行いませう（例：種籾10kgに水20L）。
- ・水の入れ替えは、浸種3日目以降1～2日ごとに行い、籾に酸素が十分に供給されるようにしましょう。なお、種籾量は4～5kg/袋とし、種籾ネットに詰めすぎないようにしましょう。
- ・浸種中に芽が伸びすぎた場合は、水から種籾を出し、脱水機で脱水した後ゴザ等に広げ、2日間程度陰干しします。その後網袋に入れ、風通しの良い日陰で保存します。ただし、芽の長さが1mm以上になると乾燥後の発芽率がかなり低下します。再浸種後は芽が動きやすくなっていますので、籾の状況を見ながら浸種期間を調整してください。

(4) 催芽（芽出し）

- ・催芽温度は、細菌病の発生を抑えるため28℃とします。
- ・籾が「ハト胸」（発芽長1mm）状態になるように、確認しながら行ってください。

育苗管理

【目標とする温度管理】

苗の生育ステージ	日中	夜間
催芽・出芽時	28℃	
緑化（第2本葉展開前）	25℃	12～15℃
硬化（第2本葉展開後）	20℃	10℃

(1) 出芽

- ・育苗器の温度は28℃とします。

(2) 緑化

- ・出芽して5～10mmになったら被覆資材を外し、緑化に移行します。
- ・苗は強い光に当たると白化してしまうため、寒冷紗などをかけて日光に慣らしていきます。

(3) 硬化

- ・換気をこまめに行い、できるだけ外気と日光に当てましょう。

※適切な温度管理を行うためには、必ず苗に近い位置に温度計を設置してください。

春の肥培管理等

(1) 土づくり

- ・堆肥などの有機物・・・土壌の保肥力や保水力が向上し、気候変動による水稻への影響が小さくなります。肥料コストの削減にも繋がります。
- ・ケイ酸質資材・・・稲体を丈夫にし、耐倒伏性・耐病性が高まります。
- ・含鉄資材・・・ガス湧きや秋落ち、ごま葉枯病の発生を抑制します。

＜施用例＞牛糞堆肥 1 t /10a、とれ太郎、ケイカリンバリュー、田んぼマスターなど

(2) 稲わらのすき込み

- ・稲わらの春すき込みは、田植え時の浮きわらやガス湧きにより生育が停滞する恐れもありますが、堆肥とほぼ同等の土づくり効果がありますので、稲わら分解促進剤を施用して燃やさずにできるだけ早くすき込みましょう。

(3) 基肥施肥の目安

- ・各品種の施肥量（窒素分量）は、右の表を目安にしてください。
- ・一発肥料を使用する場合や側条施肥、苗箱施肥等を行う場合は、土壌条件を加味しながら減肥などの調節を行ってください。

【施肥量の目安】

	窒素分量(kg/10a)		
	基肥	追肥	合計
コシヒカリ	4	2	6
ひとめぼれ	6	2	8
天のつぶ	6~8	2	8~10
里山のつぶ	6~8	2	8~10
ふくひびき	7~8	2~3	9~11

主食用米からの転換

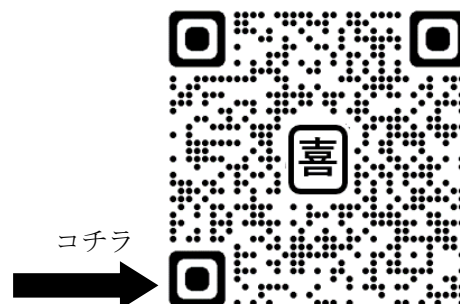
新型コロナウイルスの感染拡大で停滞していた社会経済活動の再開により、米の需要は回復傾向にあるものの、人口減少等により毎年 10 万トンずつ減少する傾向にあることから、令和 5 年産の主食用米においても、前年と同程度の減産が求められています。このため、引き続き主食用米から飼料用米や麦・大豆、土地利用型野菜等への作付転換をお願いします。

◎水田活用の直接支払交付金等の助成制度を活用し、経営の安定化を図りましょう。

肥料価格の高騰について

昨今、肥料原料の価格高騰に伴い、肥料の価格も高騰しています。このため、以下の取組を参考にしながら肥料コストの低減に努めましょう。

- ・土壌診断に基づく施肥（肥料の省力・適正化）
 - ・稲わらの秋すき込み（地力や保水力の向上）
 - ・海外市況に影響されにくい有機性資源（堆肥や緑肥等）の活用
- ※活用できる堆肥の情報は喜多方農業普及所でホームページで提供しています。



★本情報の内容や米づくりに関するお問い合わせ、相談はこちらへどうぞ

会津農林事務所喜多方農業普及所

TEL 0241-24-5744

J A 会津よつば喜多方営農経済センター営農振興課

TEL 0241-21-1801